

邪馬台国の時代④
～邪馬台国への道①三韓諸国～

河村哲夫

帯方郡から邪馬台国への使者

前号までに述べたように、中国から邪馬台国へ2回ほど使者が派遣されている。いずれも、帯方郡の役人たちである。

1回目の来訪は、正始元年(240)である。7月ごろとみられることについては、すでに述べた。

魏の皇帝から授与された贈答品を卑弥呼に引き渡すため、帯方郡の建中校尉の梯儻(ていしゅん)らが海を渡り、直接卑弥呼に授与している。

2回目の来訪は、正始八年(247)のことである。

卑弥呼が戴斯(さし)・烏越(あお)らを帯方郡に遣わして、狗奴国と戦闘状態になったことを報告し、これを受けて、帯方郡太守の王頎は塞の曹掾史(守備隊長)の張政らを邪馬台国に派遣し、正始六年(245)に下された皇帝の詔書と黄幢を直接難升米に授与し、檄文を発して激励している。

後の号で述べるように西暦247年3月24日の皆既日食を受けて卑弥呼が死去したとみれば、張政らが邪馬台国を訪れたのは、1～2月ということになるのか。

『魏志倭人伝』の帯方郡から邪馬台国までの道程は、2回にわたって邪馬台国を来訪した帯方郡の役人らの報告に基づいて記された可能性が高い。

邪馬台国を訪れた帯方郡の役人

一 回 目	景初三年(239)	<ul style="list-style-type: none"> ・6月卑弥呼の使節団(大夫・難升米、副使・都市牛利)が帯方郡に到着 ・12月卑弥呼の使節団が洛陽に到着・新皇帝曹芳に拝謁
	正始元年(240)	<ul style="list-style-type: none"> ・6月ごろ卑弥呼の使節団が帯方郡に帰着 ・7月ごろ帯方郡の建中校尉の梯儻(ていしゅん)らとともに九州に到着 <u>卑弥呼へ皇帝からの贈答品等を引き渡す。</u>
二 回 目	正始八年(247)	<ul style="list-style-type: none"> ・1～2月ごろ、卑弥呼が戴斯(さし)・烏越(あお)らを帯方郡に遣わして、狗奴国と戦闘状態になったことを報告 ・<u>帯方郡は塞の曹掾史・張政らを邪馬台国に派遣し、正始六年(245)に下された皇帝の詔書と黄幢を直接難升米に授与し、檄文を発す。</u>

「水行10日」の起点は帯方郡

したがって、邪馬台国への道程も、帯方郡が出発点——起点とされていることに留意する必要がある。そして、もう一つ留意すべきことがある。

1回目の梯儻らの来訪には、邪馬台国から中国に派遣された難升米(なしめ)と副使・都市牛利(つしごり)などが同行していることである。というより、水先案内を努めたにちがいない。

おなじく2回目の張政らの来訪についても、帯方郡に出向いた戴斯(さし)・烏越(あお)らが水先案内をした可能性が高い。

奴国の時代で述べたように、倭人は北部九州・壱岐・対馬・朝鮮半島の間を、日常的に往来していた。『魏志倭人伝』にも、対馬と壱岐の倭人は「南北に市糶(してき)」していたとある。朝鮮半島南岸には多くの弥生遺跡が残され、倭人集落も形成されていた。

倭人は、朝鮮半島と対馬・壱岐・九州との間の航路を熟知していたはずである。

そして、倭人が日常的に用いたのは航海の日数である。

『隋書』倭国伝にも、「夷人は里数を知らず、ただ計るに日をもってす」とある。

倭人は帯方郡の役人に対して、

「帯方郡から倭国まで船で 10 日」

「帯方郡から狗邪韓国まで 7 日、狗邪韓国から対馬まで 1 日、対馬から壱岐まで 1 日、壱岐から末盧国まで 1 日、合わせて 10 日」

などのように、日数でもってざっくりと答えたにちがいない。現代の我々でも、

「福岡から釜山までビートルで 3 時間」

などといって済ませることが多い。キロメートルやマイルなどという距離を日常生活で用いることはほとんどない。

しかしながら、帯方郡の役人らは中央政府に報告するに当たって、「里」で表示する必要に迫られた。それが「水行 1 日 = 1,000 里」という機械的な換算ではなかったのか。

行程	水行	里数	実際の距離	1 里の距離	備考
帯方郡→狗邪韓国	7 日	7,000 里	約 700 km	100m	海州から金海まで沿岸コースで算定
狗邪韓国→対馬	1 日	1,000 里	約 62 km	62m	金海→対馬北端
対馬→壱岐	1 日	1,000 里	約 52 km	52m	対馬南端→壱岐北端
壱岐→末盧	1 日	1,000 里	約 25 km	25m	壱岐南端→呼子
計	10 日	10,000 里	約 840 km	84m	

上表のように、1里の距離が漢代の 1 里 415 メートルにくらべてはるかに短いうえに、各区間がバラバラなのは、机上で機械的に 1 日 = 1,000 里と換算した結果ではないのか。

このことは当時の倭人たちが、死に直結する危険な夜間航海を避けるため、距離の長短にかかわらず朝出発して日暮れまでに目的地に到着することをもって 1 日と数えていたことを反映しているのではないか。

「陸行 1 月」も帯方郡が起点

おなじく、「陸行 1 月」の問題についても、倭人が「帯方郡から邪馬台国まで陸地を歩いて 1 月」と答えたことが基礎になっているのではないか。すなわち、「水行 10 日」とおなじく、帯方郡を起点にすべきではないかという推測が働く。この推測に基づき、「陸行 1 月(30 日) = 朝鮮半島の陸行 + 倭国の陸行」で計算すると、次表のとおりとなる。

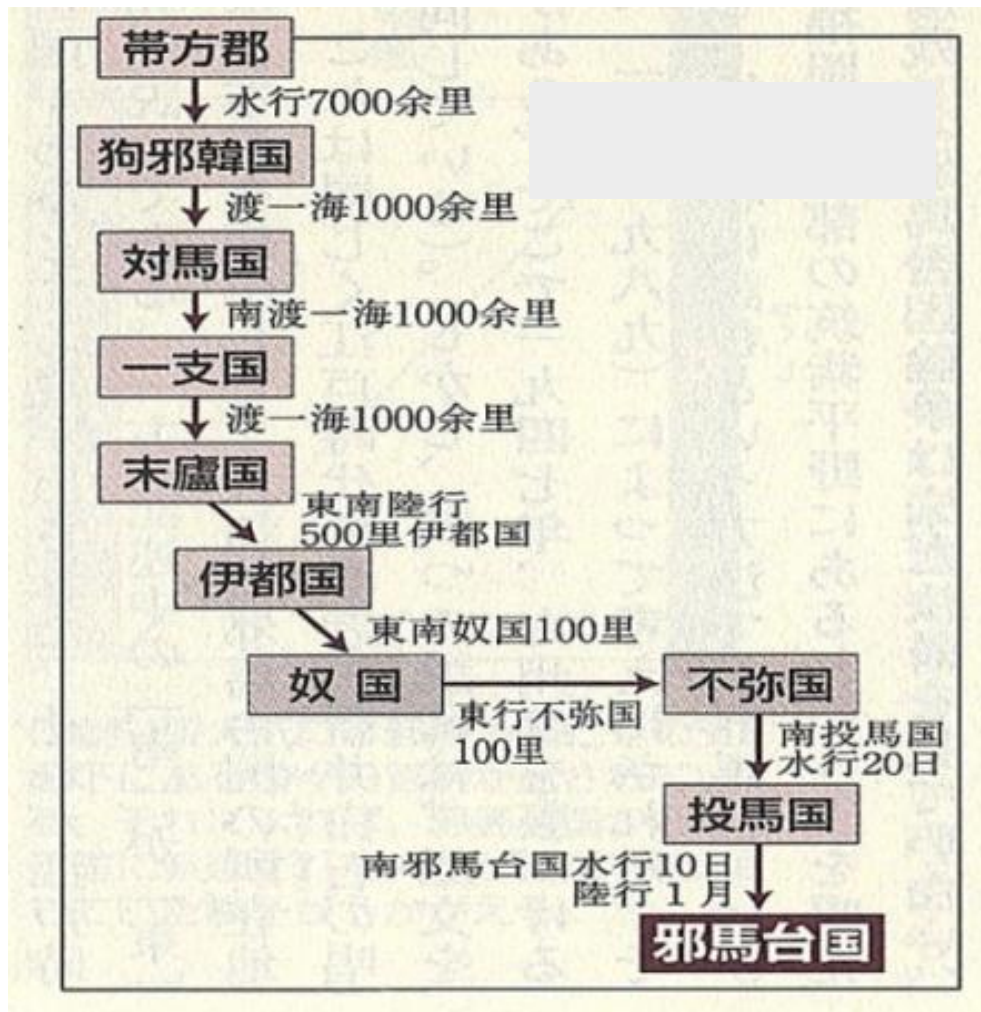
陸行	対馬・壱岐を外した場合			対馬・壱岐を含んだ場合		
	距離(A)	割合	日数	距離(B)	割合	日数
帯方郡→狗邪韓国	7,000 里	77.8%	23.3 日	7,000 里	72.2%	21.7 日
対馬	—	—	—	400 里	4.1%	1.2 日
壱岐	—	—	—	300 里	3.1%	0.9 日
末盧国→邪馬台国	2,000 里	22.2%	6.7 日	2,000 里	20.6%	6.2 日
計	9,000 里	100.0%	30 日	9,700 里	100.0%	30 日

※2,000 里(末盧国～邪馬台国)=12,000 里(帯方郡～邪馬台国)－10,000 里(帯方郡～末盧国)

※距離×割合＝日数

帯方郡から邪馬台国までの陸行は、対馬(400 里)と壱岐(300 里)を数えるかどうかにかかわらず、末盧国から邪馬台国までの陸行日数は、6～7 日という計算になる。

従来説では、下図のとおり、道程最終地点の不弥国を起点として、南へ水行 20 日で投馬国、さらに南へ水行 10 日陸行 1 月で邪馬台国というのが一般的であった。



これだと、邪馬台国は下手すれば九州の南海上にあったことになる。これが、九州説の最大の欠陥とされてきた。

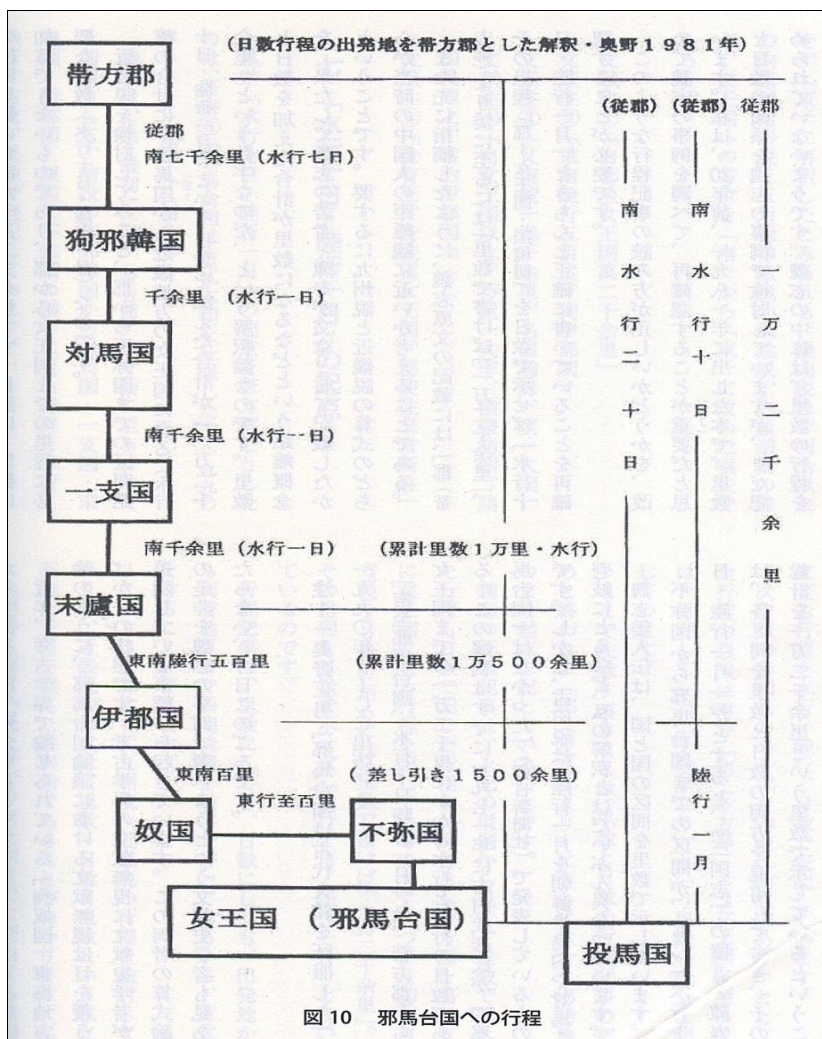
それを回避するため、近畿説においては何の根拠もなく、「南」を「東」へ読み替えて、知らん顔をつづけているのに対し、九州説においてはさまざまな案が提示され、珍説・奇説も入り乱れて、九州はバラバラというような印象すらあたえている。

しかしながら、末盧国から邪馬台国まで陸行 6~7 日であれば、まったく話がちがってくる。

末盧国(唐津市)を起点に、伊都国(糸島市)→奴国(福岡平野)→不弥国(宇美)を結ぶラインの南方には、山を隔てて筑紫平野が広がっている。邪馬台国の拠点は、筑紫平野の一角にあった可能性がきわめて高くなる。近畿にはまったく届かない。

奥野正男氏の「水行陸行」

ちなみに、長年にわたり九州説(吉野ヶ里説)を主張された奥野正男氏(1931~2020)は、その『邪馬台国はここだ』(梓書院・2010)の「水行十日、陸行一月の起点」のなかで、下図のとおり、水行十日、水行二十日いずれも、帯方郡を起点とされている。



しかしながら、陸行1月の起点は、伊都国とされている。江戸時代の参勤交代でも、九州から1か月もあれば江戸に到着していた。伊都国(糸島市)から吉野ヶ里(佐賀)へは、どんな知恵を絞ったところで、陸行1月の問題を解決することは不可能である。

陸行についても帯方郡を起点とするしかない。——これが、筆者がたどりついた結論である。

投馬国への水行の起点も帯方郡

投馬国への「水行20日」も、帯方郡を起点にして、次のように分解できる。

「水行20日=10日(帯方郡～末盧国)+10日(末盧国～投馬国)」

すると、末盧国から水行10日の距離に投馬国が位置することになる。

呼子・唐津から沿岸部に沿って玄界灘を東へ進み、関門海峡を南下すれば、東九州の豊の国(豊前・豊後)がある。瀬戸内海・日本海・列島を臨む要衝の地であり、さらに南下すれば日向(宮崎)にも通じている。

<投馬→投与(とよ)=豊(とよ)=台与(とよ)=万幡^豊秋津師比売>

という連想も湧いてくる。

ただし、以上述べたことについては、邪馬台国を論じるうえで、きわめて重要な問題なので、先の方でさらに詳しく述べることにし、本号においてはこれくらいにとどめておきたい。

帯方郡の所在地

すでに述べたとおり、景初二年(238)9月の司馬懿による遼東の公孫氏討伐によって、朝鮮半島の情勢が大きく変わり、楽浪郡と帯方郡の支配が、公孫氏から魏に変わった。

『魏志韓伝』には、「魏の景初年中(237～239)、明帝は密かに帯方太守劉昕(りゅうきん)と楽浪太守鮮于嗣(せんうし)を派遣して、海を渡って帯方・楽浪の二郡を平定させた」とある。

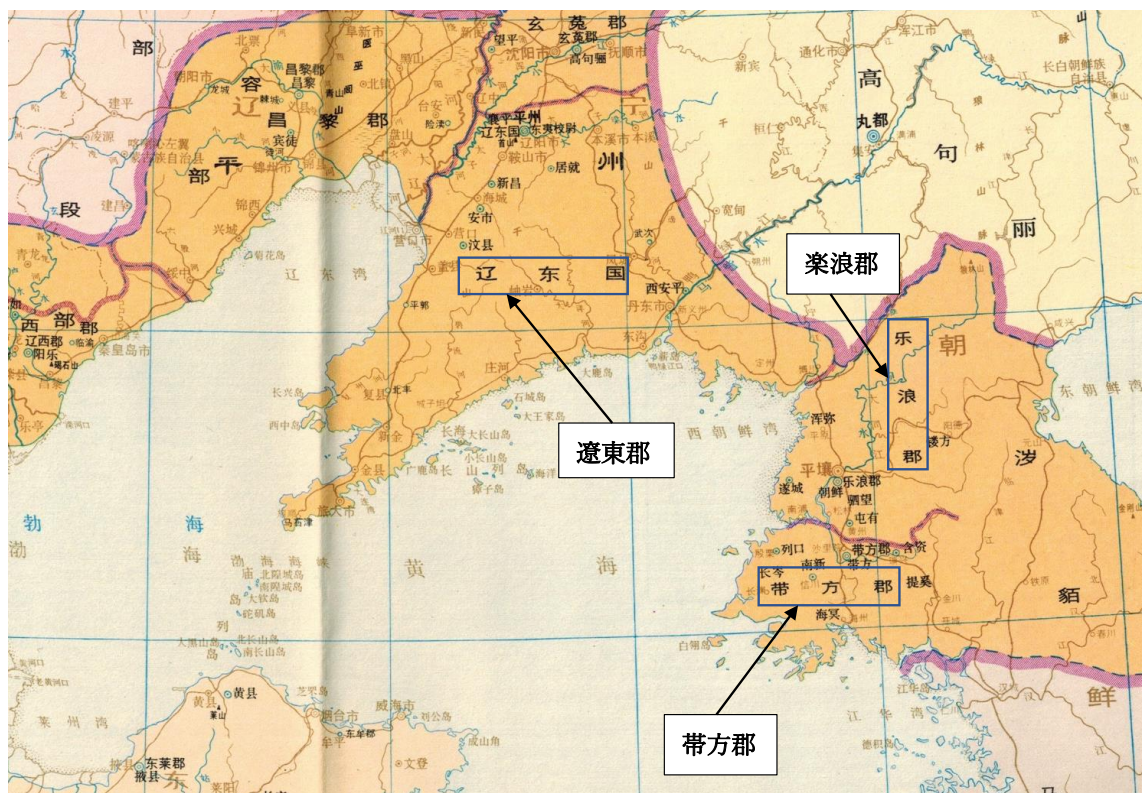
これ以降、帯方郡の太守はしばしば交替した。

	帯方郡太守	記事
景初二年(238)	10～11月ごろ劉昕着任	
景初三年(239)	1～6月ごろ劉夏に交替	
正始元年(240)	2～4月ごろ弓遵に交替	7月ごろ建中校尉の梯儵らを邪馬台国に派遣。皇帝からの贈呈品を卑弥呼に授与
正始五年(244)	弓遵	
正始六年(245)	弓遵は濊を攻撃	
正始七年(246)	韓を制圧。弓遵戦死	
正始八年(247)	王頎着任	張政らを邪馬台国に派遣
正始九年(248)	王頎	

太守の配下の官吏と軍団が拠点とした郡役所が「郡治」である。

帯方郡治の所在地については、諸説あるものの、沙里院(黄海道鳳山郡沙里院)の唐土城が有力とみられている。

そこから多くの瓦、磚(せん)、貨泉などが発見されており、さらに、その北にある墳墓群からは1912年(大正元)に「使君帯方太守張撫夷磚」という銘のある磚(レンガ)が発見されている。

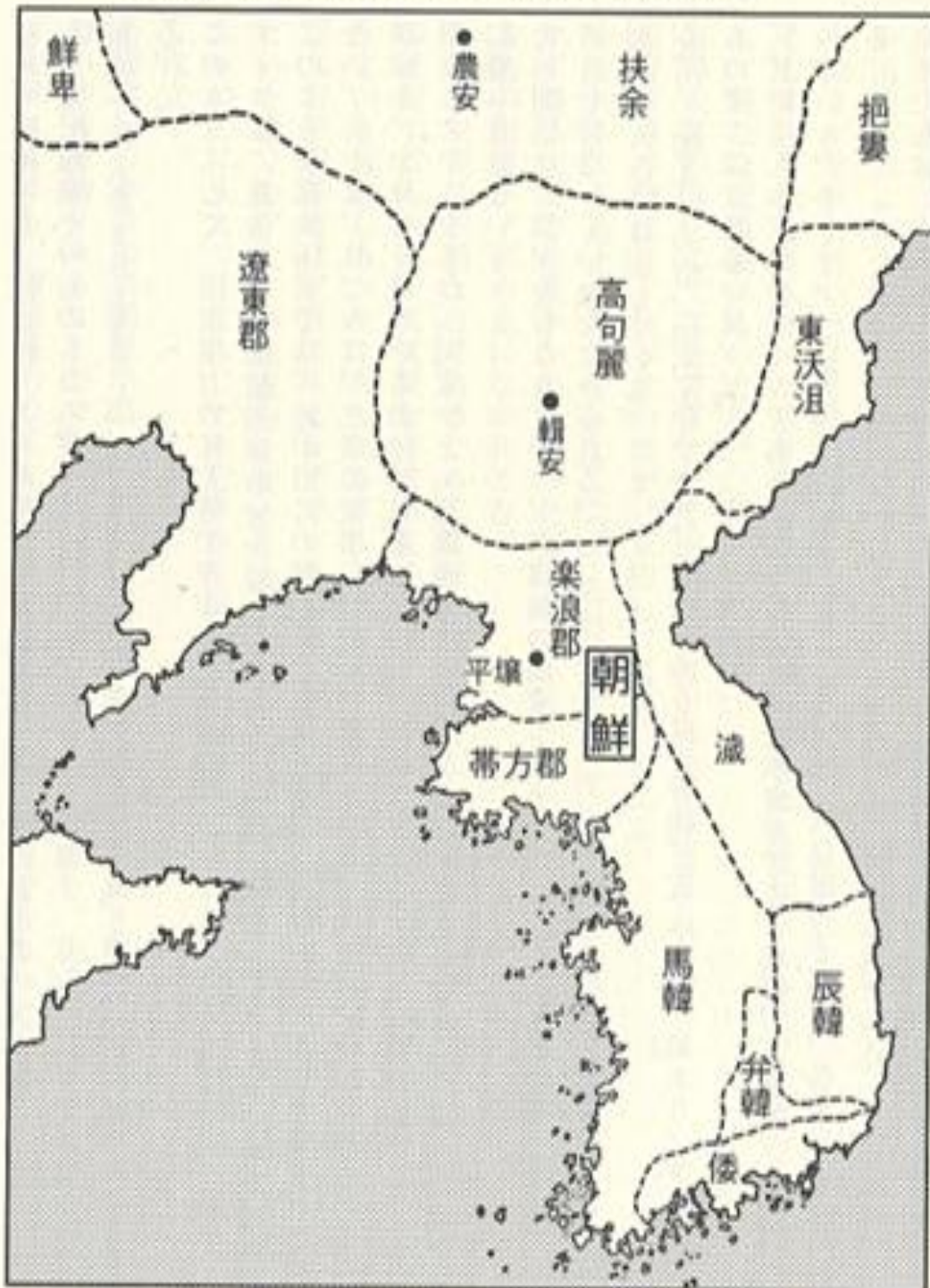




(昭和2年の5万分の1地図、銀波里)

図17 帯方郡治跡と張撫夷古墳

地図3 「東夷伝」による諸民族の地理的位置



(井上秀雄著、日本放送出版協会刊「古代朝鮮」による)

馬韓

邪馬台国の時代、帯方郡南部に三韓諸国があった。馬韓・辰韓・弁韓である。

そのうち、馬韓は朝鮮半島西部の京畿道南部、忠清南道・北道、全羅南道・北道地方の領域にあり、『魏志』韓伝によれば、農耕を営み、養蚕をおこない、およそ五十余国あったという。

<馬韓 54 か国>

1	爰襄国(えんじょう)		28	児林国(じりん)	
2	牟水国(むすい)		29	駟盧国(しろ)	盧
3	桑外国(そうがい)		30	内卑離国(ないひり)	離
4	小石索国(しょうせきさく)		31	感奚国(かんけい)	
5	大石索国(たいせきさく)		32	万盧国(ばんろ)	盧
6	優休牟涿国(ゆうきゅうむたく)		33	辟卑離国(へきひり)	離
7	臣漬沽国(しんふんこ)		34	白斯烏旦国(きゅうしうたん)	
8	伯濟国(はくさい)	のちの百濟	35	一離国(いちり)	離
9	速盧不斯国(そくろふし)	盧	36	不弥国(ふみ)	不弥国？
10	日華国(にちか)		37	支半国(しはん)	
11	古誕者国(こたんしゃ)		38	狗素国(くそ)	
12	古離国(こり)	離	39	捷盧国(しょうろ)	盧
13	怒藍国(どらん)		40	牟離卑離国(むろひり)	離
14	月支国(げっし)	大月支国？	41	臣蘇塗国(しんそと)	
15	咨離牟盧国(しりむろ)	盧	42	莫盧国(ぼくろ)	盧
16	素謂乾国(そいかん)		43	古臘国(ころう)	臘
17	古爰国(こえん)		44	臨素半国(りんそはん)	
18	卑離国(ひり)	離	45	臣雲新国(しんうんしん)	
19	占離卑国(せんりひ)	離	46	如来卑離国(によらいひり)	離
20	臣鬻国(しんきん)		47	疎山塗卑離国(そさんとひり)	離
21	支侵国(ししん)		48	一難国(いちなん)	
22	狗盧国(くろ)	盧	49	狗奚国(くけい)	
23	卑弥国(ひみ)	ヒメ国？	50	不雲国(ふうん)	
24	監奚卑離国(かんけいひり)	離	51	不斯漬邪国(ふしふんや)	
25	古蒲国(こほ)		52	爰池国(えんち)	
26	致利鞠国(ちりきく)		53	乾馬国(かんば)	
27	冉路国(ぜんろ)	路	54	楚離国(そり)	離

① 盧、離、路、臘などのラ行で終わる国名が 54 か国中 20 か国(37.0%)に上る。

② 倭の国名とおなじものがある(36 不弥国)。

『後漢書』は、

「初め、朝鮮王準が衛滿に滅ぼされ、数千人の残党を連れて海に入り、馬韓を攻めて、これを撃ち破り、韓王として自立した」

と記し、『魏志』韓伝は、

「侯(箕)準は王と潜称していたが、亡命してきた燕人の衛滿に攻撃され、左右宮人とともに海に逃れて韓地にいて、韓王を自称している」

と記す。

箕子朝鮮は、中国殷王朝の重臣であった箕子が紀元前 1000 年ごろ開いたとされ、平壤を都としていた。

ところが、末裔の箕準(前 220～前 195)は、紀元前 194 年、前漢の燕から亡命した衛滿に国を乗っ取られてしまった。そのため海に逃れて馬韓の地に入り、韓王を名乗ったというのが上記の記事である。

「箕準の子孫は絶えてしまったが、いまでも箕準の祭祀をおこなう人もいる」

と、『魏志』韓伝は記す。

馬韓諸国には、首長がいて、大きな首長を「臣智(しんち)」といい、それに次ぐものを「邑借(ゆうしゃく)」と呼んだという。全体を治める大王は存在せず、楽浪郡や帯方郡に支配されていた。

馬韓地域が広域国家として一つにまとまったのは、4 世紀前半のことである。馬韓 54 カ国のなかから伯濟国を母体として、漢城(現在のソウル)を都として、百濟が成立した。

したがって、邪馬台国の時代には、馬韓諸国を統括する盟主的な国はなく、総じて帯方郡の支配下に置かれていた。

馬韓と扶余

百濟の建国神話が、『三国史記』百濟本紀の冒頭に記されている。

それによれば、鄒牟(朱蒙・しゅもう)という人物が北夫余から卒本夫余(高句麗)の地へ逃れた当時、夫余王には3人の娘がいたが、男児がいなかった。夫余王は朱蒙を見て非凡であると評し、次女を嫁がせた。そして、夫余王が死ぬと朱蒙が王となり2人の子を儲けた。兄を沸流(ふつりゅう)といい、弟を温祚(おんそ)といった。兄弟は後継者争いに巻き込まれることを恐れ、10人の家臣らとともに南方に旅立ち、国をつくって温祚が初代の王となり、高句麗と同じく夫余から出ているため、扶余と名乗ったという。『梁書』百濟伝にも、

「百濟国は、もと(高)句麗とともに遼東の東にいた。晋の時代に(高)句麗が遼東を侵略して(その地を)支配すると、百濟も遼西・晋平の二郡の地方を占領し、みずから百濟郡を設置した」

と書かれている。

鄒牟(朱蒙)は高句麗の初代の王とされる人物である。その次子の温祚が伯濟——後の百濟の初代の王となったというのである。

つまり、伯濟——後の百濟は、高句麗・沃沮・濊とおなじく扶余族をルーツとしているということに

なる。ただし、それ以外の馬韓や三韓全体のクニグニの詳細な民族的な系譜はよくわかっていない。

扶余系など北方や遼東方面からの移流民が多くを占めていたであろうが、南方の沿岸地域は倭人の影響を受けており、弥生式土器や集落跡、墓地遺跡などの考古学的遺物も確認されている。

『魏志』韓伝には、倭人とおなじく、「入れ墨をしている者もいる」と書かれている。

辰韓

次に、朝鮮半島東南部の辰韓である。『後漢書』韓伝には、

「辰韓、古老は秦の逃亡者で、苦役を避けて韓国に往き、馬韓は東界の地を彼らに割譲したのだと自称する。そこでは国を邦、弓を弧、賊を寇、行酒(こうしゅ・酒を勧めること)を行觴(こうしょう)と称し、互いを徒と呼び、秦語に相似している故に、これを秦韓とも呼んでいる」

と書かれ、『魏志』韓伝にも、

「辰韓は馬韓の東、その古老の伝承では、秦の苦役を避けて韓国にやって来た昔の逃亡者で、馬韓が東界の地を彼らに割譲したのだと称している。城柵を立て、言語は馬韓と同じではない。そこでは国を邦、弓を弧、賊を寇、行酒を行觴と呼ぶ」

と書かれている。

秦の始皇帝が中国を支配した時代は、紀元前 221 年から紀元前 206 年のことである。万里の長城など大規模工事のために人民を徴発したが、その苦役を免れるために中国から逃れた者たちが朝鮮半島に流入し、馬韓が東方の地をあたえたのが辰韓の始まりというのである。

一方で、奴国の時代で紹介したように、朝鮮の史書『三国史記』や『三国遺事』には、新羅の建国者である赫居世(かっきよせい)のことが記されている。

赫居世の母親は中国の王室の娘の娑蘇(さそ)夫人で、夫がいないのに妊娠したため海を渡り、中国から辰韓にたどり着き、赫居世とその妃閼英(あつえい)を生んだという。

『三国史記』によると、赫居世は紀元前 57 年に即位し、紀元後 4 年に死去したといい、赫居世からは②南解王―③儒理王―④脱解王と継承されたことについてはすでに述べたとおりである。

そして、倭人の瓠公(ここう)が補佐を行い、第 4 代の脱解王(だっかい)もまた倭人系であることを紹介した。

ということは、この辰韓というのは、秦時代に中国から流入した漢人と在地系の韓人や南方の倭人と文化が混淆した土地柄であったといえよう。もちろん、北方は扶余系の濊(わい)に接しているため、扶余系の住民や文化も混在していたであろう。

『三国史記』によると、もともと 6 国であったが、後に分かれて 12 国になったという。そのうちの「斯蘆(しろ)」が後の新羅になった。

辰韓人は穀物と稲を育て、養蚕を生業としていたといい、『後漢書』や『三国志』韓伝によれば、馬韓人とは言語が異なっていたが、弁韓人とは互いに雑居し、風俗や言語は似通っていたという。

このため、弁韓と辰韓をまとめて「弁辰」や「秦人」とも呼ばれていたという。

邪馬台国の時代、辰韓には 12 か国あった。

<辰韓 12 か国>

1	已柢国(いてい)		
2	不斯国(ふし)		
3	勤耆国(きんき)		
4	難弥離弥凍国 (なんみりみとう)		
5	冉奚国(ぜんけい)		
6	軍弥国(ぐんみ)		
7	如湛国(じょたん)		
8	戸路国(ころ)	路	黒?
9	州鮮国(しゅうせん)		
10	馬延国(ばえん)		
11	斯盧国(しろ)	盧	のちの新羅、斯盧=白?
12	優由国(ゆうゆ)		

- ① 4 番目の「難弥離弥凍国(なんみりみとう)」は、弁韓の「弥離弥凍国(みりみとう)とよく似ている。難弥離(なんみり)と弥離(みり)は何らかの修飾語であるかもしれない。
- ② 「路(ろ)」と「盧(ろ)」のラ行を末尾とする国名が二か国あるが、比率からいえば圧倒的に馬韓・弁韓より少ない。

なお、「斯盧国(しろ)」は、日本語の「白(しろ)」と関係がありそうである。

『日本書紀』仲哀天皇紀には、「栲衾(たくふすま)新羅国」と書かれ、栲は楮(こうぞ)、衾は夜具のことで、「栲衾」は「白い・布」という意味の新羅の枕詞であるとされる(岩波書店『日本書紀』補注)。

のちの「新羅」は音読みすれば「しんら」であるが、日本では伝統的に「しら・き(ぎ)」と読む。「斯盧(しろ)」の時代からの長い交流を裏付けるものであろう。

もし、戸路国(ころ)が「黒(くろ)」と関係があるとすれば、さらに日本語との関係性が深くなる。

百済についても、音読みでは「ひやくさい」となるべきところ、日本では伝統的に「くだ・ら」と末尾をラ行で読む。これまた長きにわたる交流の痕跡といえよう。

さらにいえば、「任那」も、音読みでは「にん・な」であるが、日本では伝統的に「みま・な」と読むことになっている。新羅と百済に負けぬくらいの長い歴史がありそうであるが、「任那日本府」ともからんで、日韓対立の火種になることを恐れ、この問題にはあまり深入りしたくないという風潮がみられるようである。

弁韓

最後に弁韓である。馬韓の東、辰韓の南に接し、倭国とは海で接しており、後の任那・加羅と重なる地域である。

すでに述べたように、金首露が金官国(駕洛国)を建国し、加羅 6 か国連合の盟主となった。

『魏志』韓伝によれば、辰韓と風俗や言語が似通っていたといい、土地は肥沃で、五穀や稲の栽培に適し、蚕を飼い、縑布を作った。鉄の産地で、倭、濊などが採掘し、市場での売買では鉄が金銭のようであったという。

また、倭人とも習俗が似ており、男女とも入れ墨をし、礼儀正しく、道ですれ違ふと、すすんで相手に道を譲ったという。

弥生式土器あるいは弥生集落が最も密集した地域で、多くの倭人が混住していたとみられる。

邪馬台国の時代、弁韓には 12 か国あった。

<弁韓 12 か国>

1	弥離弥凍国(みりみとう)		
2	接塗国(せつと)		
3	古資弥凍国(こしみとう)		小伽耶(固城)
4	古淳是国(こじゅんぜ)		
5	半路国(はんろ)	路	
6	楽奴国(らくぬ)		
7	弥烏邪馬国(みうやま)	邪馬=山?	大伽耶(高霊)
8	甘路国(かんろ)	路	
9	狗邪国(くや)	邪	狗邪韓国、金官加耶(金海)
10	走漕馬国(そうば)		
11	安邪国(あんや)	邪	安羅(阿羅)国
12	瀆盧国(とくろ)	盧	倭と界(さかい)を接す。

- ① 12 か国のうち、路(ろ)、盧(ろ)が 3 か国、狗邪(かや)=加羅(から)、安邪(あんや)=安羅(あら)と記されることから、邪(や)もラ行とみれば、さらに 2 か国、計 5 か国(41.7%)の末尾がラ行である。
- ② 弥離弥凍国(みりみとう)の弥離(みり)、古資弥凍国(こしみとう)の古資(こし)、弥烏邪馬国(みうやま)の弥烏(みう)は何らかの修飾語の可能性がある。

任那について

ところで、『魏志』韓伝は「弁韓」ないし「弁辰」と記すが、『三国遺事』など朝鮮の文献は「加羅(から)」あるいは「伽耶(かや)」と記す。

『魏志』韓伝の「狗邪国(くや)」は加羅国(から)、「安邪国(あんや)」は安羅(あら・阿羅)国とみられるから、『魏志』も朝鮮の史書とおなじく、「加羅」の存在を認識していたことになる。

ところが、5 世紀になると、中国文献では弁韓が消失し、「加羅」に加えて、新たに「任那(みまな)」が登場してくる。つまり、「弁韓→加羅+任那」という構造である。

「任那加羅」と一つにくくって読むべきだとする議論もあるが、『宋書』倭国伝の 451 年の条「使持節都督倭(①)・新羅(②)・任那(③)・加羅(④)・秦韓(辰韓⑤)・慕韓(馬韓⑥)六国諸軍事」や 478 年の条「使持節都督倭(①)・新羅(②)・任那(③)・加羅(④)・秦韓(⑤)・慕韓(⑥)六国諸軍事、安東大将

軍、倭王」とあるように、任那と加羅を区分けしないと6か国にならない。「任那と加羅」が正しい。

○『宋書』

西暦	倭	記 事
438	珍	倭王讚没し、弟珍立つ。この年、宋に朝献し、自ら「使持節都督倭・百濟・新羅・ <u>任那</u> ・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大將軍倭国王」と称し、正式の任命を求める。
451	濟	文帝から「使持節都督倭・新羅・ <u>任那</u> ・ <u>加羅</u> ・秦韓・慕韓六国諸軍事」を加号される。
477	武	興没して弟の武立つ。武は自ら「使持節都督倭・百濟・新羅・ <u>任那</u> ・ <u>加羅</u> ・秦韓・慕韓七国諸軍事安東大將軍倭国王」と称する。
478	武	順帝、武を「使持節都督倭・新羅・ <u>任那</u> ・ <u>加羅</u> ・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大將軍倭王」とする。

ところが、『日本書紀』(岩波書店)の補注では、

『三国史記』列伝の強首(650年頃の人)の言葉として『臣本任那加良人』の一句が記され、
(中略)中国史籍では任那と加羅とを別箇に数えているけれども、五世紀の初めにおける任那の正しい呼称は『任那加羅』であったとすべきであろう

とする。

これは、中国の史書が一貫して加羅と任那を別箇に区分していることを軽んじるとともに、後述するような「任那日本府」問題にからめて、任那を矮小化する日韓双方の風潮と連動した解釈というべきである。

広開土王碑

ちなみに、現時点での最も古い「任那」の記録は、高句麗の「広開土王碑」である。

石碑には、次のように刻まれている。

「十年庚子教遣歩騎五万往救新羅從男居城至新羅城倭満其中官軍方至倭賊退■来背急迫至任那加羅從拔城城即帰服安羅人戍兵■新羅城■城倭満倭潰城■■尽更■来安羅人戍兵満■■■■其■■■■■■■■■■言」(Ⅱ面)

「永楽十年(400)、好太王(広開土王)は歩兵と騎兵五万を派遣して新羅を救った。男居城から新羅城(慶州)に至ったが、倭はその中に満ちていた。官軍(高句麗軍)が至って倭賊は退却した。官軍は倭の背後から急迫して、任那・加羅の從拔城に至った。城はすぐに帰服した。安羅人の戍兵(守備兵)は新羅城と(塩)城を抜いた。倭寇は大潰した」

というような意味である。

原文は句読点のない漢文で記されているから、もちろん「任那加羅」である。「任那・加羅」と区

切ったのは、中国の史書に基づく。

いずれにせよ、欠字が多く、意味の取りづらい文章となっているが、高句麗の歩兵と騎兵 5 万人が新羅救援のために派遣され、新羅城を占拠していた倭軍と激しい戦闘を行って退却させ、逃げる倭軍を追って任那と加羅の兵が立てこもる従拔城を迫撃して城を降伏させている。

『日本書紀』の任那

『日本書紀』にも任那が登場する。

初出は、第 10 代崇神天皇六十五年の条である。

「六十五年の秋七月に、任那国、蘇那曷叱知(そなかしち)を遣(まだ)して、朝貢(みつきたてまつ)らしむ。任那は、筑紫国を去ること二千余里。北(きたのかた)、海を隔てて鶏林(新羅)の西南にあり」

とある。

崇神天皇即位 65 年の 7 月に、任那国が蘇那曷叱知(そなかしち)を朝貢のため日本に派遣したことが記されている。蘇那曷叱知とは、氣比神宮(敦賀市曙町)に祭られているツヌガアラシトのことである。

ところが、蘇那曷叱知(=ツヌガアラシト)は崇神天皇崩御により会うことができなかった。

つづけて、『日本書紀』はきわめて重要な記事を掲載する。

「是歳(垂仁天皇二年)、任那人蘇那曷叱智、請(もう)さく、『国に帰らなむ』とまうす。けだし、先皇の世に来朝(まうき)て未だ還らざるか。故、蘇那曷叱智に敦(あつ)く賞す。よりて赤絹一百匹をもたせて任那の王(こぎし)に賜(たびつかわ)す。然(しこう)して新羅人、道に遮(た)へて奪(う)いつ。其の二つの国の怨(うらみ)、始めて是の時に起る」

「活目(いくめ)天皇(垂仁天皇)に仕へて三年になりぬ。天皇、ツヌガアラシトに問ひて曰はく『汝の国に帰らむと欲(おも)ふや』とのたまふ。対(こた)へて謗(もう)さく、『甚望(ねがは)し』ともうす。天皇、アラシトに詔(みことよ)せて曰はく、『汝、道に迷はずして必ず速く詣(まうで)いたれられましかば、先皇に遇(まうあ)ひて仕へたてまつらまし。是を以て、汝が本国の名を改めて、追ひて御間城(みまぎ)天皇の御名を負(と)りて、便(すなは)ち汝が国の名にせよ』とのたまふ。よりて赤織の絹を以てアラシトに給ひて、本土に返しつかわす。故、其の国を号(なづ)けて弥摩那(みまな)国と謂ふは、それ是の縁(ことのもと)なり」

すなわち、

「お前の本国の名前を改めて、御間城天皇(ミマキスメラミコト)の名前を取って、お前の国の名前としろ』と言われた。それで赤織の絹をツヌガアラシトに与えて、本土に帰された。それでその国を名づけて『彌摩那国(ミマナ)』という」

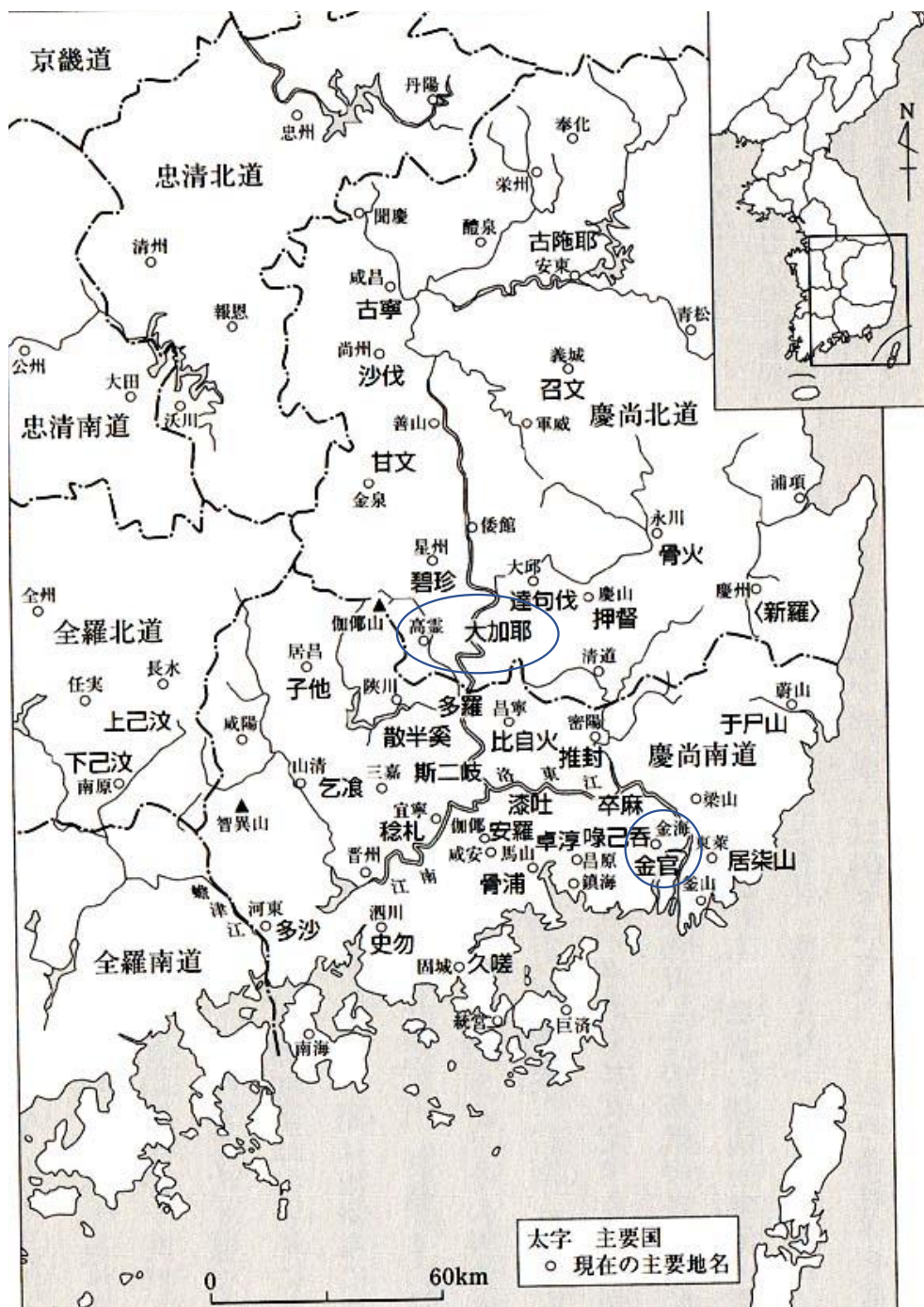
と、崇神天皇の和風諡号である「御間城(ミマキ)」から「彌摩那(ミマナ)」すなわち「任那(ミマナ)」という新たな国名がつくられた、としている。

『日本書紀』には、蘇那曷叱知(=ツヌガアラシト)の出身地についても記されている。

「御間城(みまぎ)天皇の世に、額に角(つの)有(お)ひたる人、一つの船に乗りて、越の国の笥飯

浦(けひのうら)に泊れり。故、其抛(そこ)を号(なづ)けて角鹿(つぬが)といふ。問ひて曰く『何れの国の人ぞ』といふ。対(こた)へて曰さく『意富加羅国(おほからのくに)の王(こぎし)の子、名はツヌガアラシトなり』

蘇那曷叱知(=ツヌガアラシト)の出身は、意富加羅国——つまり、加羅諸国の一国である「大伽耶」(大加羅)とされる。高霊を拠点とする。



時代はいつか

蘇那曷叱知(=ツヌガアラシト)が来日したのは、崇神天皇末から垂仁天皇にかけての時代とされている。『日本書紀』による在位期間は下表のとおりとされている。

しかしながら、『日本書紀』は何らかの理由によって、古い時代の天皇の在位年代を誤っている。合理的・科学的に是正しなければならない。

そういう観点から、統計学を駆使して補正を試みられたのが安本美典氏である。筆者は、歴史的な偉業と評価している。

この安本氏の「統計的年代論」によって補正された在位期間は、崇神天皇が 342～357(15 年)、垂仁天皇が 357～370(13 年)となり、4 世紀半ばごろの天皇に位置づけられている。

『日本書紀』の記事内容をみても、356 年に辰韓諸国を統一した新羅が登場していることから、やはり、時代は 4 世紀半ばごろとみられる。

よって、『日本書紀』に基づけば、任那という国名は 4 世紀半ばの崇神天皇の和風諡号をもとに名づけられた、ということになる。

すると、広開土王碑の 400 年の記事をさかのぼる最古の文献的記録が『日本書紀』の記事ということになる。

代	天皇名	『日本書紀』の在位期間	安本氏の「統計的年代論」
1	神武天皇(127 歳)	前 660～前 582(78 年)	278～298(20 年)
2	綏靖天皇(84 歳)	前 581～前 549(32 年)	298～302(4 年)
3	安寧天皇(57 歳)	前 548～前 511(37 年)	302～307(5 年)
4	懿徳天皇(77 歳)	前 510～前 477(33 年)	307～310(3 年)
5	孝昭天皇(113 歳)	前 475～前 393(82 年)	310～317(7 年)
6	孝安天皇(137 歳)	前 392～前 291(101 年)	317～324(7 年)
7	孝靈天皇(128 歳)	前 290～前 215(75 年)	324～332(8 年)
8	孝元天皇(116 歳)	前 214～前 185(29 年)	332～338(6 年)
9	開化天皇(111 歳)	前 158～前 98(60 年)	338～342(4 年)
10	崇神天皇(120 歳)	前 97～前 30(67 年)	342～357(15 年)
11	垂仁天皇(140 歳)	前 29～後 70(99 年)	357～370(13 年)
12	景行天皇(106 歳)	71～130(59 年)	370～386(16 年)
13	成務天皇(107 歳)	131～191(60 年)	386～390(4 年)
14	仲哀天皇(52 歳)	192～200(8 年)	390～395(5 年)
	神功皇后(100 歳)	201～269(摂政) (68 年)	390～410(20 年)
15	応神天皇(110 歳)	270～312(42 年)	410～425(15 年)
16	仁徳天皇(110 歳)	313～399(86 年)	425～438(13 年)

加羅と任那

先に、「弁韓→加羅+任那」となることをしめした。ところが、『日本書紀』では加羅諸国に属する、意富加羅国(大加羅)が「任那」に国名変更したことになっている。

すなわち、「弁韓→加羅→任那」である。

ここで、『日本書紀』の記事を時系列的に並べてみよう。

『日本書紀』	
年	記事
崇神天皇六十五年	七月、 <u>任那国</u> 、蘇那曷叱知(そなかしち)来日
垂仁天皇二年	<u>任那人</u> 蘇那曷叱智が帰国を希望。 <u>任那の王</u> (こきし)に赤絹一百匹をみやげに渡す。
垂仁天皇二年	垂仁天皇「お前の本国名を御間城(みまき)天皇の名を取って、 <u>彌摩那国</u> (ミマナ)に改めよ」

これをみると、蘇那曷叱知(=ツマガアラシト)が来日当時から、任那出身と認識されていることがわかる。すなわち、任那の起こりに関する地名説話の前に、すでに任那国から来日したものとして記されている。

地名説話と任那

『日本書紀』あるいは『古事記』『風土記』には、地名の起こり——いわゆる地名説話が載せられている。たとえば『日本書紀』神功皇后紀には、

「夏四月三日、北方の肥前国松浦県(まつらのあがた)に行き、玉島の里の小川のほとりで食事をされた。皇后は針を曲げて釣針をつくり、飯粒をえさにして、裳(も)の糸を取って釣糸にし、川の中の石に登って、釣針を垂れて神意を伺う占いをおこない、『私は西の方の財宝の国を求めています。もし事を成すことができるなら、川の魚よ釣り針を食え』といわれた。釣りざおを上げると鮎(あゆ)がかかった。皇后は『珍しい魚だ』といわれた。ときの人はそこを名づけて、梅豆羅国(めずらのくに)という。いま松浦というのはなまったものである。それでその国の女たちは、四月の上旬になるたびに、針を垂らして年魚(あゆ)を取ることが今にも絶えない。ただし、男は釣っても魚を取ることができない」

と書かれている。『肥前国風土記』にも、

「むかし、氣長足姫尊(神功皇后)が新羅を征伐しようと思われ、この郡にお出かけになって玉島の小川のほとりでお食事をお進めした。そこで皇后は縫針を曲げて釣針とし、飯粒をえさにして、裳(も)の糸を取って釣糸にし、川の石の上に立って、釣糸を捧げ、祈誓して『私は新羅を征服してその財宝を得たいと思っている。そのことがうまく成就して凱旋するならば、こまやかな鱗の魚よ、私の釣針を食え』とおっしゃられた。ほんのしばしの中に、はたしてその魚がかかった。皇后は『何と希見物(めずらしきもの)ぞ』とおっしゃられた。それにより希見国(めずらのくに)といったが、いまは

なまって松浦の郡といっている。こういうわけでこの国の婦女たちは孟夏(はつなつ)四月には縫い針を使って年魚を釣る。男は釣るには釣っても獲物がかからない」

とほぼ同様の記事が載せられている。

ところが、「松浦(まつら)」という地名は、「統計的年代論」では390～410年ごろに活躍したとみられる神功皇后の時代からおよそ150年前の『魏志倭人伝』にはすでに登場しており、「末盧(まつろ)国」と書かれる。

したがって、神功皇后がはじめて命名した地名ではない。

このような地名説話は、もともと地域で呼びならわしていた地名を、天皇あるいは皇族などの権威によって、公に認知し、一般化する儀式を伝えるものではないか、と筆者はみている。地図やナビがない時代における地名共有化のための知恵であったろう。

任那の起こり

すでに述べたように、永楽十年(400)の広開土王碑が任那に関する最も古い記事であるが、任那の起こりをしめす記事ではない。北方の高句麗と朝鮮半島南部の任那とは、距離的に大きく隔絶されているにもかかわらず、高句麗は任那という国の存在を認識している。400年より前に任那が生まれていなければならない。

その一つの大きな手がかりが、『日本書紀』崇神天皇と垂仁天皇の記事である。

ここには、任那に関する地名の起こりが記載されており、年代を補正すれば、一応300年代、すなわち4世紀の半ばごろとなることは前述した。

しかしながら、『日本書紀』の地名説話が、「末盧(まつろ)」のように、地名の追認的な性格を有することを鑑みれば、任那についても、4世紀半ばよりも前の時代に遡及する可能性も考えられよう。

そもそも、任那はどのような性質を有していたのか。そして、どういった歴史的経緯をたどったのか。

広開土王碑の5世紀以降であれば、「大和朝廷の統治力の及ぶ地域、もしくは強い影響下にあった地域」と定義することができよう。

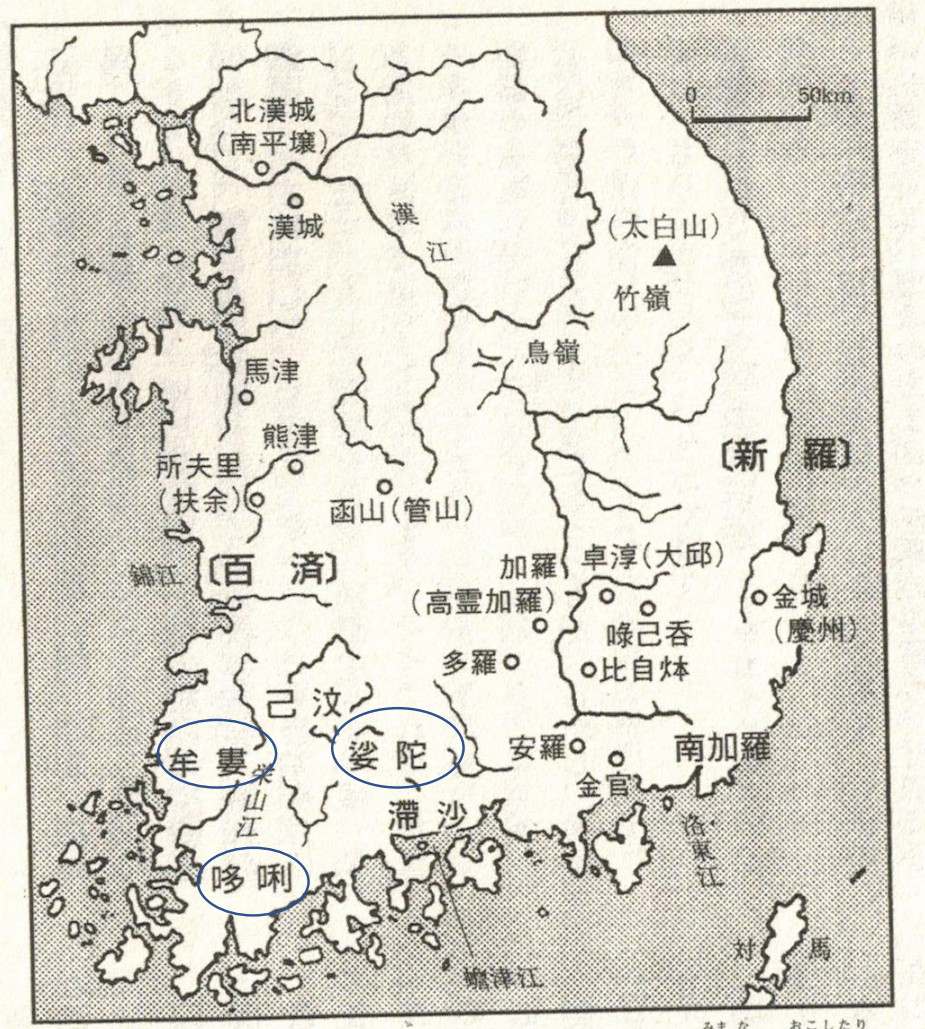
『日本書紀』によると、継体天皇六年(512)、天皇は穂積臣押山(ほづみのおみおしやま)を百済に派遣して筑紫の馬四十四匹を献上させたが、この穂積の臣押山は任那の「哆唎(たり)」の国守であったという。また、おなじ年の十二月には百済の武寧王(志摩王)が大和朝廷に使者を派遣し、「任那国の上哆唎(おこしたり)、下哆唎(おろしたり)、婆陀(さだ)、牟婁(むろ)の四県を百済に与えてほしい」と要請したという記事がある。「任那四県割譲事件」といわれるものである。

四県のうち、上哆唎、下哆唎はいずれも栄山江東岸地域で、婆陀は全羅南道求礼郡の塘津江上流にある沙等あるいは沙等村あたりといわれ、牟婁は全羅南道の西部の霊光、高敞、務安地方といわれている(安本美典著『応神天皇の秘密』)。

6世紀の任那に属する四県は錦江流域を拠点とする百済の南部にあり、全羅南道のほぼ全域である。

これからみると、日本の統治領域の拡大に伴い、任那の領域も大きく拡大している。

洛東江流域を中心とした地域から大きく領域を広げている。



6世紀の朝鮮半島南部(井上光貞『日本書紀』中央公論社より)

4世紀半ばの崇神天皇・垂仁天皇には、日本の統治力は朝鮮半島にはほとんど及んでいなかったはずである。任那に関して定義した「大和朝廷の統治力の及ぶ地域、もしくは強い影響下にあった地域」とみることはできない。

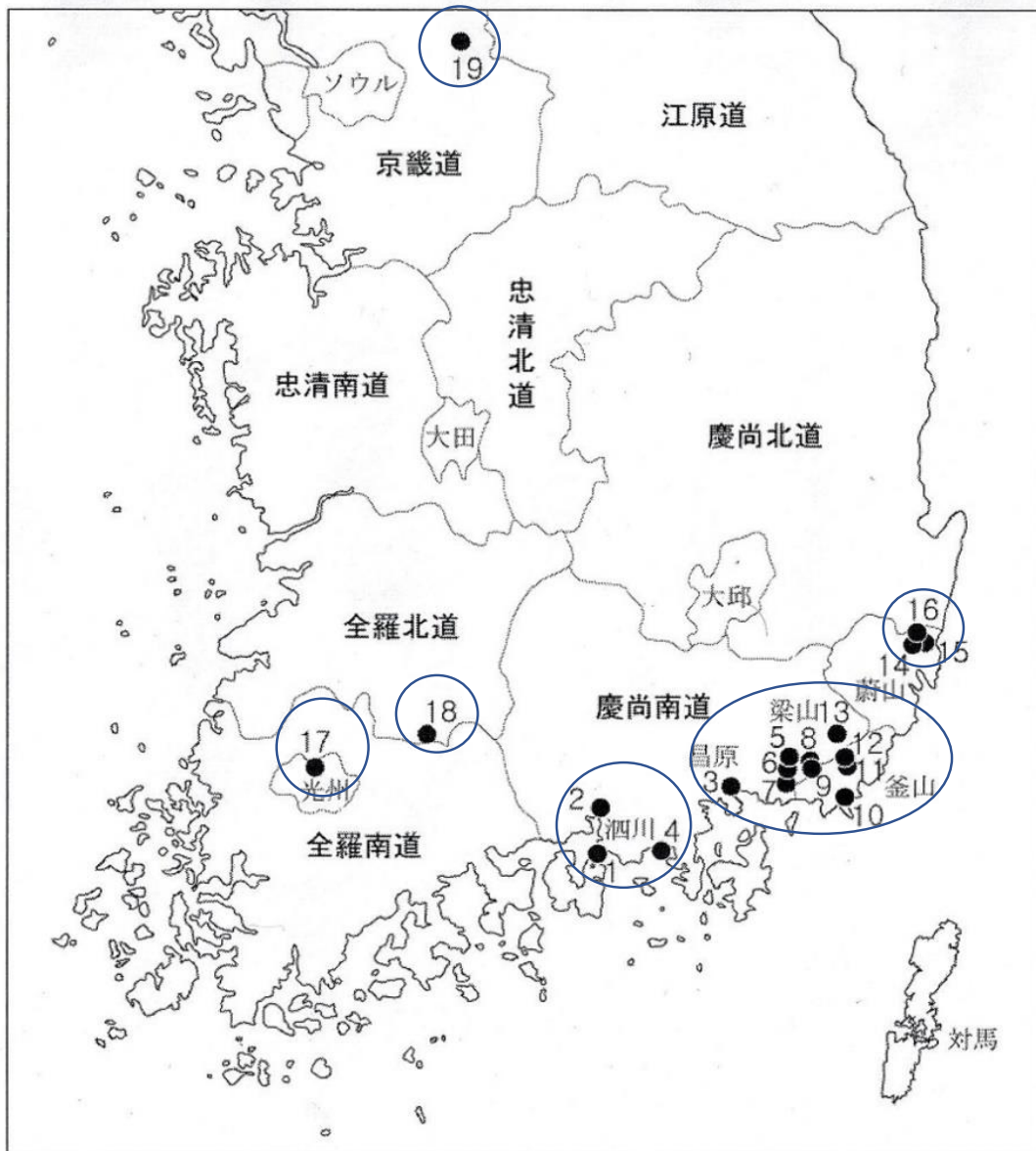
任那はいつ生まれたのか。何をもちて任那(みま・な)と呼んだのか。

ひょっとしたら、任那というのは、もともと「倭人または倭人系の集落・クニ」に端を発していたのではないか。

すでに述べたとおり、弁韓地域ないし加羅・任那地域は、紀元前後の弥生式土器や倭人系の集落が多くみられる地域である。

奴国の時代において縷々述べたとおり、紀元前後の北部九州の盟主といえば、奴国であった。「奴＝那」である。

「任那(みま・な)」というのは、奴国の支配権が及んだ地域——「那(奴)の任地」というようなニュアンスがあったのではないか。



弥生式土器の分布状況

ただし、3 世紀以前の文献資料がないことから、あまりにも飛躍した空想という評価を免れることはできないであろう。

しかしながら、しばしば掲載している井上秀雄氏の【「東夷伝」による諸民族の地理的位置】の「倭」と明示された地図よりも、はるかに刺激は少ないはずである。

いずれにしても、文献上「任那」は日本の崇神天皇時代の 4 世紀半ばにはじめて登場し、4 世紀末の「広開土王の碑」や 5 世紀の中国文献に登場するが、それ以前の倭人系の集落・クニをさす概念として「任那」が生じていた可能性があり得ることを指摘しておきたい。

任那と日韓の歴史認識

任那は、広開土王碑に記された391年の朝鮮出兵以降、日本の統治力が強まるにつれて、その領域を大きく拡大していった。そして、『日本書紀』によれば、任那の領域を統治するため、「任那日本府」が設置された。

しかしながら、2010年(平成22)の「日韓歴史共同研究委員会」では、

「任那日本府(「在安羅諸倭臣等」とは、5世紀代の倭と半島との関係や地方豪族の独自の通交などにより、加耶地域、特に古くから倭とつながりの深かった安羅に居住した倭人の一団であり、加耶諸国と共通の利害を有し、ほぼ対等な関係で彼らと接し、主に外交交渉に協同で従事していたとまとめることができ、安羅における具体的な存在形態は不明であるが、従来イメージされているような出先機関的な機構としてのまとまりを形成していた訳ではなく、平時におけるその存在意義は大きなものではなかったと結論付けられた」

とされている。

加耶(羅)諸国のうち、「特に古くから倭とつながりの深かった安羅に居住した倭人の一団」が、「加耶諸国とほぼ対等な関係で協同して外交交渉に従事しており」、任那日本府は日本の出先機関的なものではなく、平時における存在意義も希薄なものであった、というのである。

どのような交渉がおこなわれたか承知しないが、任那を希薄化し、矮小化しようとする韓国側の攻勢に対して、残念ながら日本側が屈服した印象が強く感じられるものとなっている。

「羅(ラ)」文化圏——古代交流の痕跡か

以上述べた三韓諸国と倭国は地理的には海を隔てて位置しているものの、中国の文献では、かなり近接しているよう記されている。

文 献	記 事
『後漢書』東夷列伝	(奴国は)倭国の極南界(最南端)
『後漢書』東夷列伝	(馬韓の)南は倭と接す。 その(弁辰の)南はまた倭と接す。
『後漢書』倭人伝	その(邪馬台国の)西北界の狗邪韓国
『魏志』韓伝	(韓の)南は倭と接す。
『魏志』韓伝	(弁韓の)瀆盧国は倭と界(さかい)を接す。
『魏志』倭人伝	その(倭の)北岸の狗邪韓国

倭人は、朝鮮半島南部と対馬、壱岐、北部九州の圏域を中心に、海を自由に往来していたとみられ、朝鮮半島南部に集落もつくっていた。

そして、前述した三韓諸国の馬韓・辰韓・弁韓を構成するクニグニのなかに、ラ行の国名末尾が多く存在していることを指摘した。とりわけ弁韓と馬韓に多い。

- ① 馬韓 54 か国のうち、20 か国(37.0%)の国名末尾がラ行である。
- ② 辰韓 12 か国のうち、2 か国(16.7%)の国名末尾がラ行である。
- ③ 弁韓 12 か国のうち、5 か国(41.7%)の国名末尾がラ行である。

ところが、北部九州各地にも、多くのラ行の地名が存在している。

末盧国(マツ・ロ)、唐津(カ・ラ)、与良(ヨ・ラ、対馬)、馬渡島(マダ・ラ)、加唐島(カカ・ラ)、小呂島(オ・ロ)、平戸(ヒ・ラ)、脊振(セフ・リ)、多良(タ・ラ)、高良(コウ・ラ)、早良(サワ・ラ)、多々良(タタ・ラ)、豊浦(トユ・ラ)などである。ざっと数えただけでも相当の数に上る。

「浦(ウ・ラ)」と同源であるとする、それこそ無数にあるといっている。あたかも、「ラ(羅)・文化圏」とでも命名してもいいくらいである。

北部九州の倭人と朝鮮半島南部地域との古い交流のなかから形成されたものであろう。

「ラ」の言語的な由来はよくわからないが、日本語の数詞の数え方が高句麗語に似ているという指摘もある。

	日本語	高句麗語
1	hito	—
2	huta	—
3	mitu	○mit
4	yotu	—
5	itutu	ucha
6	mu	—
7	nana	○nanun
8	ya	—
9	kokono	—
10	to	○tok
	○の数	3

高句麗といえば扶余系である。当然、朝鮮半島に近い日本人と言語のなかに扶余系がまじっていることは否定できないであろう。

DNA の解析や言語学的な研究の進展によって、この分野での解明が進むことを心から期待している。

(つづく)